11. 森林の持つ二重性について知っておきたい

日本列島における森林の面積は国土の約 70%で我が国は森林国であり、暮らしの環境は大なり小なり、直接・間接的に多くの森林とのかかわりがあります。森林は土砂流出を抑制し水源環境としての環境財の基盤となっているといわれています。しかし同時に、土砂災害に関わる多くの要因を有しており、これまで多くのエネルギーが森林環境の整備並びにその影響を抑制するために費やされてきました。近年は、流木による災害が多くなっており、山腹崩壊も地震や豪雨によって目立ってきています。

森林からすると、別に土砂を抑え込もうとしているわけでもなく降水を勝手に地中にため込んでいるのでもなく、自分たちが生育するための環境を作っているだけということですから。それがたまたま樹木の根茎が表層の土壌を抑え込んで、降水が一気に出不いという結果につながっているということです。見方を変えれば、山地崩壊などは環境の変化による必然なのかもしれません。そういう環境を抑制したりするために人が様々な対応をしてきたというわけで、最近の土砂災害はその限界を超えている、つまり森林環境を大きく変えているということを示しているのだと思います。その要因は、気象の変化、樹木の生育管理力の低下、山地の改変といったこととなります。森林から流出するものをすべて抑止するということは不可能で、それに対しては、影響の範囲や度合い、危険予知といったことを組み合わせた、森林環境を見据えて共生するといった生活環境を維持する知恵、工夫、勇気が求められていると思います。

森林神話は絶大なものではありませんので、森林が有する土砂災害を抑制する効果にも限界があるということを知っておくべきです。土砂崩れは木根の伸長深度より深いところで発生することもあります。木根は無限ではありませんし、樹木や植生による土砂の緊縛範囲はごく表層に限られ表層崩壊が繰り返されている可能性もあります。そのために、森林自体が土砂災害を助長するというようなこともあり得ます。最近、多発している流木災害では、土砂や土石とともに大量の流木が一気に流出することで、想像以上の破壊エネルギーを経験することになりますし、直撃のほかには下流部での橋脚などの閉塞で周囲が思わぬ浸水をするというような被害も発生しています。

人間は森林環境を支配することはできないわけで、その恩恵を謙虚にとらえて、少なくとも森林環境の急激な変化を促進させる行為を避けつつ、相手の様子をうかがいながらその影響を避けるということが求められているような気がします。もちろん、これまでの施工されてきた砂防や治山事業は適切に継続されなければなりません。森林環境を自然との共生、森林の生命力という観点から、森林の限界とその特性を謙虚に見詰め直すための理解が必要なのではないのでしょうか。

災害のたびに想うことは、関わることでの森林の保全と利用する人とのコミュニケーションが不足しているような気がします。利用する側は機能とコストを重視しているだろうし、保全する側は環境財という視点で取り組んでいるのですが、何か共通した思いに原初的な暮らしという視点があれば、また違った対応が生まれるような気もしています。